

PROFILE

持田 澄子

東京医科大学生理学第一講座教授



平成11年4月1日に小西真人先生が主任教授に着任された東京医科大学生理学第一講座の教授に平成13年2月1日より昇任いたしました。小西真人主任教授が講座を取りまとめ、医学生教育の方針の決定や責任を持たれていらっしゃるの、私は至って気楽な環境にあります。ただ、研究のおもしろさを若人と分かち合うべく、私のもとに学生や博士研究員を集めることができておりませんことを歯がゆく思う毎日であります。

東京医科大学に助手として勤めて、登坂恒夫先生・小林春雄先生の研究テーマでありました、シナプス伝達の研究にめぐり合いました。以来ずっと、交感神経節細胞を用いて、シナプス蛋白分子に関わる電気生理学的研究を続けてまいりました。私は、幸運にも、2度留学の機会がありました。最初は、UCSF生理学教室 Benjamin Libet 教授のもとで、登坂先生が留学された際に見つけられ、小林先生が発展させた「交感神経節シナプス伝達の長期増強」の分子メカニズムの研究をいたしました最後のポストドクでした。Society for Neuroscience が出版した“The History of Neuroscience in Autobiography” Volume 1 に書かれましたように、脳の働きを反映する交感神経節でのシナプスの可塑的現象を、先駆的アイデアをもって20年間追求された Libet 教授に畏敬の念を抱かざるを得ません。2度目の留学では、神経終末からの伝達物質放出機序として“Non-Vesicular Theory”を唱えられた CNRS 神経分子生物学研究所 Ladislav Tauc 教授のもとで、シナプス応答を記録しながら、神経細胞に注入した破傷風、ボツリヌス神経毒素のミュータント mRNA によ

って発現した毒素によるシナプス伝達阻害を観察して、毒素の活性部位を確定する研究をいたしました。神経伝達物質放出メカニズムを模索する新しい研究方法を取り入れた画期的な研究でした。その後の私の研究スタイルを決定することになった二人の研究者との出会いは、研究ということを知る貴重な体験となりました。

その後も、すばらしい研究者にめぐり合い、多くを学ぶとともに励まされてまいりました。平成11年に授与されました猿橋賞は、女性科学者に希望を持つようにと「女性科学者に明るい未来への会」が賞を授与して23年が経ちました。そろそろ必要性が無くなって、廃止してもよくなったのでしょうか？これからは、学生や若い研究者の能力を伸ばす手助けをすべく努力を続けたいと考えております。

略歴

- 昭和50年3月 北里大学薬学部薬学科卒業
- 昭和50年4月 東京医科大学生理学第一講座助手
- 昭和57年3月～59年3月
カリフォルニア州立大学医学部
留学
- 昭和62年4月 東京医科大学生理学第一講座講師
- 昭和63年10月～平成2年11月
仏国国立科学研究機構 (CNRS)
特別研究員
- 平成9年8月 東京医科大学生理学第一講座助
教授
- 平成13年2月 現職